

調査報告

看護教育効果を探る

－「地域」と「在宅」の看護に対する学生の理解から－

山本 澄子・杉山 希美*・山田 静子**・水野 正延***

(2014年12月15日受稿)

抄録: 「地域」と「在宅」の看護に対する学生の理解について、授業を進めるにあたりその確認を行った。その結果、大きな混乱を抱いていることはなかった。しかし学生の中の一部には混乱していることが伺われた。入学後早期の時点で看護職の実践者を招いて看護職の実際についての講演の導入によるイメージづくりは大切であり、学習意欲の向上につながると考えられた。また、看護学基礎教育で頻繁に出てくる語句の十分な説明と授業途中での確認の必要性を感じ、今後の授業構築に役立てていきたい。

I. はじめに

平成8年（1996年）に保健師助産師看護師学校養成所指定規則（以下、指定規則）の改正により、保健師教育課程科目の「公衆衛生看護学」が「地域看護学」に変更となった。それから15年後の平成23年（2011年）に指定規則の改正で「地域看護学」から「公衆衛生看護学」に再び変更された¹⁾。現在は大学院教育の中で専門性のある保健師育成の声が再び挙がり看護師教育、保健師教育の変貌が期待されている。

一方、平成9年（1997年）に看護教育の中で「在宅看護論」が位置づけられた。「公衆衛生看護学」は現代の健康課題に、より対応できる機能強化を求め、保健師教育の更なる教育強化を図っている²⁾。「在宅看護論」は日本の高齢化率の反映等で看護基礎教育カリキュラムへの導入から、健康課題の居宅での生活機能の充実化を求めている³⁾。そのような変化の中、看護教育を学ぶ学生は「地域」と「在宅」をどのように捉えているのだろうか、また看護教育上で必要とされることは何なのだろうか。

近年、看護系大学が220か所を超えた昨今、看護教育の重要度と需要度の高まりが推測されると

ころである。村嶋らは、看護教育と臨地実習施設の課題、看護の質保証の維持の課題等を再見直し、再検討の重要性が問われる⁴⁾と述べている。看護の需要が高まる中で、公衆衛生看護教育、在宅看護教育に期待が向けられることは予測できるところである。

そこで、「地域」と「在宅」の看護に対する学生の受けとめや意見・考えを探り、そこから看護教育の課題の有無を問い、授業を進めるにあたり学生が記した内容を授業に反映させながら、今後の地域における看護教育に関して考察したので報告する。

II. 方法

A大学2年次看護学生を対象に、授業科目「在宅看護概論」の初回授業開始時に「地域」の看護、「在宅」の看護に関する興味もしくは関心の有無およびその理由についての記載を依頼した。

対象学生数は2010年度115名、2011年度113名の計228名、実施時期は2010年度、2011年度の各々4月に実施した。

北海道文教大学人間科学部看護学科

*愛知県立大学看護学部

**中部学院大学看護リハビリテーション学部看護学科

***四日市看護医療大学

Ⅲ. 授業科目の組み立てと本調査との関連

授業科目「地域看護学概論」は1年次後期2単位(30時間)、「在宅看護概論」は2年次前期1単位(15時間)の構成立てとなっている。調査対象学生は1年次に「地域看護学概論」を履修済みである。2年次前期に実施した理由は、1年次に授業の中で「地域看護」、「在宅看護」という語句の説明、相違を教授し、混乱のないように意識づけをさせて授業を進めた経緯がある。「地域」はcommunityであり、人々の共同体、組織体であり、人々の生活の場である。「地域」における看護は広義に捉え、保健・医療・福祉の場で看護が行われることと解釈する。「在宅」は人が居宅生活の継続を目指すものであり、「在宅」における看護は狭義に捉え、その人の健康に関わる生命維持、安全・安楽で快適な生活の継続を得ることができるよう諸サービスを受ける権利を有し、居宅で看護が行われることと解釈する。今回、1年次後期授業終了時に学生がどのように受けとめて授業を聴いていたか確認していなかった。学生の語句に対する受けとめに混乱は生じていないか、興味・関心はあるのだろうかと教授する側が不安を抱いた。地域と在宅は密接な関係にあり、その相互作用によって人々の生活が守られている。したがって、科目間の混乱のないように、それぞれの意味するところを周知していくことは大切なことと思われる。

Ⅳ. 倫理的配慮

授業科目「在宅看護概論」を進めるにあたり、「地域の看護」と「在宅の看護」に対するイメージを知りたいこと、興味や関心の程度を知りたいこと、語句の混乱が認められる場合は授業の中で修正し

ていきたいこと、今後の授業の参考にしたいと考えていることを口頭説明した。用紙は授業科目「在宅看護概論」の初回授業開始時に配布したが、調査には自由意思での参加でよいこと、協力しないことによる不利益は一切生じないこと、記述は無記名式で個人が特定されないこと、鍵のかかる指定回収ボックスに投函をもって回答することの承諾を得たと解することを口頭説明した。本調査を実施するにあたり、事前にA大学B学部の所属長に相談して許可を得た。

Ⅴ. 結果

調査用紙の回収状況は、2010年度115名中105名、2011年度113名中111名の計216名(94.7%)であった。地域・在宅の看護に対する興味もしくは関心の割合を表1に示した。

1. 「興味もしくは関心がある」と回答した学生の理由

2010年度では、「地域の看護」に興味もしくは関心があると答えた学生は10名(9.5%)、「在宅の看護」に興味もしくは関心があると答えた学生は51名(48.6%)であった。その両方ともに興味もしくは関心があると答えた学生は27名(25.7%)であった。「地域の看護」、「在宅の看護」あるいは、その両者に興味も関心もあるとした割合は83.8%の高値を示した。興味もしくは関心を抱いた理由は、「保健師というものに興味があるから」、「私たちが暮らしていく中で一番身近で人々を支えているから」、「保健師になりたいから」、「漠然として考えのまとまっていない今の自分にじっくりから」、「保健師の資格が欲しいから」、「地域で行う看護に何があるか興味があるから」、「看護の対象が患者だけでなく広いから」等であった。

表1. 地域・在宅の看護に対する興味もしくは関心の割合

単位：%

項 目	2010年度	2011年度
「地域の看護」に興味もしくは関心がある	9.5	2.7
「在宅の看護」に興味もしくは関心がある	48.6	58.6
「地域の看護」、「在宅の看護」の両方に興味も関心もある	25.7	30.6
「地域の看護」、「在宅の看護」の両方に興味も関心もない	0	0
わからない	16.2	8.1

2011年度では、「地域の看護」に興味もしくは関心があると答えた学生は3名（2.7%）、「在宅の看護」に興味もしくは関心があると答えた学生は65名（58.6%）であった。その両方ともに興味もしくは関心があると答えた学生は34名（30.6%）であった。「地域の看護」、「在宅の看護」あるいは、その両者に興味も関心もあるとした割合は91.9%の高値を示した。興味もしくは関心を抱いた理由は、「看護師の仕事も保健師の仕事もあるから」、「親が保健師と話す機会が多く、保健師のことを聞くから」、「地域の看護は幅広い感じがするから」等であった。

2. 「わからない」と回答した学生の理由

2010年度では、すべてに興味や関心がないと答えた学生は一人もいなかったが、「わからない」と答えた学生は17名（16.2%）認められた。その内容は、「まだ知識がないのでわからない」5名、「興味なくはないが、よく知らない」5名、「地域の看護についても在宅の看護についても考えたことがない。どういうものか自身がしっかりわかっていない」3名、「良さがわからない」2名、「在宅の看護について何も知らないので考えたことがない」1名、「地域について大きな展望をもつのは苦手」1名であった。

2011年度においても興味や関心がないと答えた学生は一人もいなかったが、「わからない」と答えた学生は9名（8.1%）認められた。その内容は、「在宅の看護がよくわからない」2名、「興味なくはないが、よくわからない」2名、「しっかり理解してから判断したい」1名、「イメージがつかない」1名、「昨年の授業は面白くてよかったが、今一つピンと来ていない」1名、「自分がどんな分野で働くか具体的に考えていないのでわからない」1名、「地域の看護も在宅の看護も実際に見たことがないのでわからない」1名であった。

3. 興味もしくは関心があった理由の中での特記すべき事柄

「地域の看護」に興味もしくは関心がある、「在宅の看護」に興味もしくは関心がある、その両者に興味もしくは関心があると回答した中で、特記すべき事柄と思われる内容があった。

2010年度では、「ホームヘルパーに興味があるから」、「テレビ番組で場面を見たことがあるから」、「地域看護は漠然とした考えのままとまっている今の自分にじっくりいくから」、「将来、保健師の資格が欲しいだけ」、「いろんな分野の勉強がしたいから」、「看護全域に多少興味があるから」等であった。

2011年度では、「よく聞く言葉だから」、「テレビ番組のドラマで見たから」、「ホームヘルパーになりたい」、「保健師という資格が欲しいから」、「特別養護老人ホームでアルバイトしたから」、「いろいろな分野を模索したいから」、「母がホームヘルパーをしているので、私もなりたいたいから」等であった。

4. 「地域の看護」、「在宅の看護」に対するイメージ・受けとめ方

「地域の看護」と「在宅の看護」そのものに対するイメージ・受けとめ方はさまざまであり、2010年度では、「看護の仕事は大変な仕事である」、「家族が倒れたときの自身の無力さを実感」、「社会資源の活用や報道から看護職を知った」等、本調査に対する真摯な受けとめ姿勢の回答を伺わせるものであった。2011年度では、「地域の看護」と「在宅の看護」について、「地域は広くて領域がわからないが、在宅の看護は領域が明確と思う」、「保健師に大変興味がある。地域の看護と在宅の看護は深いかかわりがあると思う」、「今後ますます高齢者が増え、訪問の看護が必要になるのではないか」、「今、重要な看護だと考えている」という回答の一方で、「自宅を訪れて治療の補助をする仕事に興味がある」、「どういうことをやっているのか知りたい」、「興味や関心がないことはないが、今はまだわからない」、「いろいろな分野を模索したい」等の回答があった。

VI. 考 察

1. 「地域の看護」と「在宅の看護」への興味・関心について

「地域の看護」に対する興味・関心を抱いている学生が少数であったことは、2010年度、2011年度いずれも2年次の学生にとっては新しい科目の初回であったこと、授業科目「在宅看護概論」が耳慣れていなかったかもしれないことが考えられた。しかし、「地域の看護」と「在宅の看護」の両方に対する興味・関心の程度も約3割であった。目的意識をもって入学してくる学生は少数なのか。各看護領域の「概論」は、その領域における導入部分であり、その後の方法論や実習へとつなげていくうえで興味・関心をもたせる重要な部分と考える。教育担当者の一人として責務を痛感する。

「在宅の看護」に興味・関心があるのは2010年度が約5割、2011年度が約6割であった。このことから、これからの授業に対し学生が期待をもって臨んでいたのではないかと推察する。しかし、保健師教育課程、看護師教育課程についての相違を認識しての回答であったかどうかは不明である。

2. 学生の回答と教育カリキュラムとの関連について

2010年度は約2割、2011年度は約1割の学生が1年次を終了して2年次の4月を迎えた時点で、どうしてこの道を選択して歩んでいるのかについての意識が備わっていないことがわかった。本当に看護職を目指しているのだろうかの懸念を多少抱かざるを得ない結果ではあったが、1年次からの看護職に対するイメージを鮮明に与えることが不足していたとも受けとめざるを得ない。1年次の教育カリキュラムの大半は、一般教育科目、専門基礎科目で占められているところが多いと思われるが、専門教育科目の看護系の科目の挿入が全くないわけではない。しかし、「地域の看護」、「在宅の看護」と提示すると、特別なものとの受けとめ

があるのではないかと推察した。「まだ知識がないから」、「よく知らないから」、「理解してから」等の意見に裏づけされていると考える。慎重に受けとめての回答ではなかったかと思われる。入学前の学生個々の入学動機と入学後の教育による動機づけの方法で、興味もしくは関心があると回答した学生の特記すべき事柄や、1～2割の「わからない」と回答した学生に対する意識や認識の向上を図ることは可能ではないかと考える。

3. 看護教育の早い時期に興味や関心の程度をアップする対処法

両年度の回答からは、「地域の看護」と「在宅の看護」とともに興味・関心がないわけではないが現時点では明確なものを自身が抱いていない、だから知ろうとしているという気持ちではなかったかと推察する。

「地域の看護」や「在宅の看護」に対して興味や関心を早期に抱いて授業に臨んでもらうには、どのような対応策（法）があるだろうか。入学後早期の時点で、病院等に勤務している看護師、訪問看護ステーション等で勤務している看護師、保健所あるいは市町村で勤務している保健師等、看護職の実践者を招いて看護師職の実際についての講演の導入により、看護師、保健師のイメージを学生に与える方法が一方法とも思われる。導入の時期は1年次後期もしくは2年次前期が望ましいと思われる。看護教育機関のほとんどは1年次後期から専門科目の導入が多くなされるカリキュラムと思われる。1年次前期は基礎看護学領域が入るであろうが、高校を卒業して間もない時期で心のゆとりももてない1年次前期の時期の導入は時期尚早と考える。イメージづくりは大切である。学習意欲にも大きく左右する。漠然とした自身の将来のイメージでもよい。適切なイメージを早期の段階で学生個々が抱ける環境づくりや場の提供は必要不可欠と考える。学生個々が職場で働く看護職のイメージを早期の時点でインプットしていくことは、学生の学習意欲やイメージづくり、目

指したい道への意識づけにつながるのではないだろうか。看護職それぞれの、また看護それぞれの共通点、相違点、長所、短所を含めた内容を、それぞれの立場から早い段階で具体的に教授していく必要があると考える。自分は何を目指しているのかわからない、決められない理由が限りなくゼロに向かうことが期待される。それは、学年が進んでからの途中退学等を未然に防ぐことにもつながるのではないだろうか。

専門技術を必要とする専門職種に将来就こうとする学生には「看護とは何か」を積極的に追及してほしいと願う。野嶋は看護職者一人ひとりが看護の価値の内在化とidentityや看護観の確立が看護の自律性を確立していくと述べている⁵⁾。Carperは看護学の知について4パターンを明示した⁶⁾。「The Science of Nursing」, 「The Art of Nursing」, 「The Component of Personal Knowledge」, 「The Moral Component」の4知で、野嶋は看護学はこの4つの知の統合で成り立つと述べている⁵⁾。これらの4知を大学4年間の看護学基礎教育でどこまで到達することが可能なのか。看護学基礎教育の質保証の観点からモデル・コア・カリキュラム導入の報告書により看護実践能力を基盤とする人材育成教育の提案がなされている⁷⁾。本調査では看護教育上で教員がよく使用する語句を学生は区別もわからないまま、また質問をしないまま授業を聴講している可能性が示唆された。津村らは調査の結果、語句の説明の必要性を痛感し授業の中で語句の説明から入ることを心がけ実践していった⁸⁾。Carperの4知を意識した教育の導入により、学生の看護に対する意識の高揚を早期に高めることは可能ではないかと考える。

VII. 結 語

「地域」と「在宅」の看護に対する学生の理解について、授業科目間に混乱はないかと疑問を抱き、授業を進めるにあたりその確認を行った。その結果、大きな混乱を抱いていることはないが、学生の中には目的意識をもって入学したとは言い

難い学生も少なからず認められた。学生の中の一部には、「地域」と「在宅」の看護の区別がついていない状況と思われた。

早期からの看護職に対するイメージづくりは大切であり、学習意欲の向上につながると考えられた。また、看護学基礎教育で頻繁に出てくる語句の十分な説明と授業途中での確認の必要性を感じ、今後の授業構築に役立てていきたいと思う。

謝 辞

共同研究者であった近藤八恵美様に深謝いたします。

文 献

- 1) 岡本玲子：看護教育における地域看護学。日本地域看護学会，14（1）：17－19，2011.
- 2) 宇座美代子他：公衆衛生看護とは－その概念－。前掲書，14－16.
- 3) 石垣和子，上野まり編：在宅看護論 自分らしい生活の継続をめざして。5－8，南江堂，2012.
- 4) 村嶋幸代他：修士課程「保健師コース」開設の意図と経過。保健師ジャーナル，64（8）：742－747，2008.
- 5) 野嶋佐由美：看護の知の構築に向けての方略。日本看護科学会誌，32（2）：72－76，2012.
- 6) Barbara A.Carper：Fundamental Patterns of Knowing in Nursing. A History of Nursing Ideas，129－137，1978.
- 7) 野嶋佐由美他：先導的の大学改革推進委託事業－看護系大学におけるモデル・コア・カリキュラム導入に関する調査研究報告書。2011.
- 8) 津村寿子，山本澄子他：公衆衛生看護学用語集。東海・北陸・近畿ブロック保健婦養成施設協議会，1993.
- 9) 佐伯和子：保健師学生が学ぶ公衆衛生看護学とは。看護教育，53（6）：452－458，2012.
- 10) 本田彰子他：学問としての在宅看護の歴史と未来。看護教育，53（9）：752－758，2012.

Investigating the Effects of Nursing Education:

From the Viewpoint of Students' Understanding of Community and Home Care Nursing

YAMAMOTO Sumiko, SUGIYAMA Kimi, YAMADA Shizuko, and MIZUNO Masanobu

Abstract: Student comprehension regarding 'Community Health Nursing' and 'Home Care Nursing' was ascertained before beginning the class. Results revealed that most of the students had an understanding of the terms. It was presumed that the ideas of an actual practitioner will facilitate in moulding the image of the nursing profession. Therefore, inviting such practitioners as lecturers at an early stage after students enter the department is important, thus promoting students' motivation to learn. In addition, it was observed that a thorough explanation of frequently used terms in fundamental nursing education and reviewing them during class were necessary, which will be incorporated in future classes.